小林かいち・絵葉書『灰色のカーテン』（右）、『二号街の女』（ロゴ内）京都・さくら井屋［各部分］
タイトルロゴ内・左上から右下へ：さくら井屋（文様）、吉村幸一郎（文様）、杉浦非水、竹久夢二、小林かいち、藤島武二［各部分］

Press Release

Taisho Image Gerie

The Rise of Graphic Design & Illustration in Japan 1900s–1930s

大正イマジュリイの世界

デザインとイラストレーションの青春 1900s—1930s

2025.7.12 sat.—8.31 sun.

竹久夢二・表紙絵　『汝が碧き眼を開け』（セノオ楽譜56番）
1917年初版／1927年7版

SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

現代日本の大衆文化の源流は、明治末期から昭和初期までの先端メディアであった印刷物の中に見出すことができます。なかでも印刷技術の革新が進んだ大正時代（1912-1926）は出版界が興隆し、西洋の芸術やアール・ヌーヴォー、アール・デコの様式と日本の伝統を融合させた独特な美意識のデザインやイラストレーションが生み出されました。
本展では、文学と美術、音楽などが混じりあう近代の書物と刷物を愛した山田俊幸氏の収集品から大正時代を中心とする約330点を選びご紹介します。大衆に忘れがたい記憶を残した儚（はかな）く膨大なイメージ群――大正イマジュリィの世界を、藤島武二、杉浦非水、竹久夢二などの主要な作家たちと、時代を映すさまざまな意匠を切り口に掘り下げます。

展示構成

二つの視点で作品をまとめます

〈大正イマジュリィの作家たち〉

創造的な足跡を残した作家を
クローズアップします

〈さまざまな意匠（イマジュリィ）〉

テーマ別に、匿名の作者の仕事を含む
イマジュリィを紹介します

展覧会の見どころ

1　デザインとイラストレーションの青春 1900s-1930s

大正時代に進んだ大量印刷技術にのせて新しいイメージを発信し、日本人の感性を変えた人々の仕事をたどる展覧会です。藤島武二や杉浦非水、竹久夢二、高畠華宵、蕗谷虹児（ふきやこうじ）、古賀春江など、普段はまとめて展示することの難しい画家たちの装幀や挿絵を、山田俊幸氏の幅広い出版物の収集品によって一堂に展示します。日本のグラフィックデザインとイラストレーションの黎明期*を多角的に紹介します。

＊「デザイン」「イラストレーション」という呼称が日本に浸透したのは1950年代以降です。

2　書物と刷物、儚い宝物

テレビもインターネットもなかった時代の庶民にとって、印刷物はほぼ唯一の視覚的な情報源であり、お気に入りの挿絵はくりかえし眺める宝物でした。当時の印刷には江戸期以来の多色刷木版の技術や、石版も用いられています。紙の印刷自体が減りつつある今、希少な存在になった大正イマジュリィの「物」としての存在感を感じていただける展覧会です。

3　現代日本の大衆文化のルーツ

大正時代は、明治時代の立身出世主義と昭和中期の戦時統制のあいだにあって、個人の内面に関心が向き、感性や感情が表現されました。いま私たちが享受しているロマンティックな恋愛観、江戸と京都の日本情緒、魅力的なイラストレーション、都会的なデザインなどは、この時代に生み出されたものです。国際的にも認知された日本の独特な大衆文化のルーツを発見できます。

【大正イマジュリィとは】

イマジュリィ（imagerie）とはフランス語で、ある時代やジャンルに特徴的なイメージ群のことです。1900-30年代の日本には西洋から新しい複製技術が次々に到来し、雑誌や絵葉書、ポスター、写真などに新鮮で魅力的なイメージがあふれました。当時の活気に注目した研究者はこれらの大衆的複製物を「大正イマジュリィ」と総称し、2004年に学会を結成しました。

【監修者　山田俊幸氏（1947-2024）】

近代文学から出版文化に興味を広げ収集・研究。大正イマジュリィ学会の創立会員・役員を務め、自身の収集品を核に2010年「大正イマジュリィの世界」展（渋谷区立松濤美術館）を開催。同展はその後も巡回。元・帝塚山学院大学教授、日本絵葉書会会長等。

山田氏は本展を準備中の昨年秋に逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

大正イマジュリィの作家たち

大正時代の出版文化に創造的な足跡を残した作家12名をとりあげます。彼らは民主化の気運が高まった明治末期（1900年代）から戦時色が影を落とす昭和10年代までのあいだ、複製されて大勢の手元に届く出版物のデザインを通じて大衆のひとりひとりが主役になる新時代の明るさを印象づけました。同時に、個人が心の奥に抱く郷愁や憧憬、日々の繊細な感情、衝動、欲望も視覚化しました。それらは現在も私たちの心を捉える魅力を持っています。

◉藤島武二（1867-1943）

―アール・ヌーヴォー様式で浪漫（ロマン）を広めた巨匠

日本近代美術を代表する洋画家・藤島武二は、穏やかな写生からロマン主義的な題材を経て、パリとローマへ留学した後に装飾的な独自の画風を確立しました。1901年から文芸雑誌『明星』（1900年創刊）の表紙や挿絵を担当。アール・ヌーヴォーの旗手アルフォンス・ミュシャを模したスタイルでヴィーナス（＝明星）を描いた表紙は、与謝野晶子らの情熱的な詩歌と相まって、恋愛や憧れなど個人の感情を謳う時代の幕開けを印象づけました。

広報用画像1
藤島武二・表紙絵　『明星』第11号
1901年　東京新詩社　個人蔵

◉杉浦非水（ひすい）（1876-1965）

―日本で最初のグラフィックデザイナー

杉浦非水は、1900年のパリ万博を機に渡欧した黒田清輝らが持ち帰った書物やポスターなどにあふれるアール・ヌーヴォーに魅了され、図案の道に進みました。流行を牽引した三越呉服店（現・三越）の広報印刷物を手がけ、時流を追ってウィーン分離派の直線的な様式もとりいれます。三越の嘱託を辞した後はデザイン研究と後進の育成に尽力しました。菊池幽芳の大衆小説『お夏文代』は、木版と銀の箔押しを用いたぜいたくな装幀です。

広報用画像2
杉浦非水・装幀／菊池幽芳・著　『お夏文代』
1915年　春陽堂　個人蔵

◉橋口五葉（ごよう）（1881-1921）

―美しい装幀本の先駆者

橋口五葉は洋画を学んだ後、江戸趣味に触発されて歌麿や広重を研究しました。浮世絵の復興を志した版元・渡邊庄三郎が出版した新版画の美人画で知られています。在学中から俳句雑誌『ホトトギス』に挿絵を描き、夏目漱石の『吾輩は猫である』（1905年）から『行人』（1914年）までの装幀を手がけた、美しい洋装本の先駆者でもあります。画像は1911年に刊行された縮刷版の装幀です。

広報用画像3
橋口五葉・装幀／夏目漱石・著　寸珍『吾輩ハ猫デアル』
1911年初版／1919年57版　大倉書店　個人蔵

◉竹久夢二（1884-1934）
―新しい抒情と美のインフルエンサー

竹久夢二はドイツの美術雑誌『ユーゲント』などから新しい芸術を吸収しました。早稲田実業学校在学中から雑誌に投稿したコマ絵*に労働者や女性、子どもなどの庶民を抒情豊かに描いて青年層を魅了します。儚げな「夢二式」美人で一世を風靡した後も、文筆から作詞、小間物のデザインまで独特の美意識を発揮しました。

＊新聞雑誌などに文章とは関係なく掲載される絵のこと。

広報用画像4
竹久夢二・表紙絵　『汝が碧き眼を開け』（セノオ楽譜第56番）
1917年初版／1927年7版　個人蔵

恋や夢を歌う西洋音楽を広めた「セノオ楽譜」に、夢二は1916年から270点以上の表紙絵を提供。後に「大正ロマン」と呼ばれる時代の気分を象徴するシリーズです。

広報用画像5
竹久夢二・表紙絵　『婦人グラフ』第2巻第2号
1925年　国際情報社　個人蔵

『婦人グラフ』は1924年から28年まで国際情報社が発行した総合文化情報誌です。表紙のデザインは、多色刷木版によるアール・デコ様式のファッション画をぜいたくに掲載したパリの婦人雑誌『アール・グー・ボーテ』を意識しています。

◉高畠華宵（たかばたけかしょう）（1888-1966）
―モダンな美少女像の創造者

高畠華宵は日本画の素養と西洋文化の知識を活かし少年少女雑誌にりりしい少年や美しい少女を描いた人気挿絵画家です。とりわけ少女については、まだ珍しかった洋服の着こなしや日常のマナーを具体的に提案し、日本人が共通して思い描くモダンな少女像をつくりあげました。華宵が描くファッションは「華宵好み」と呼ばれて少女読者から熱烈に支持され、それを模した服飾品や反物が商品化されたほどでした。

広報用画像6
高畠華宵・口絵「初夏の風」『少女画報』18巻5号
1929年　東京社　個人蔵

◉岸田劉生（1891-1929）
――内なる美の探求者

キリスト教徒であった岸田劉生は、自分の内面に美とは何かを探求しました。文芸美術雑誌『白樺』を通じてゴッホやゴーガンに傾倒した後、ドイツのアルブレヒト・デューラーや中国の宋元画などの美醜を越えた人間性の表現に魅了されていきます。『生長する星の群』は、白樺同人の武者小路実篤が自己実現と共生の理想を求めてつくった「新しき村」の文芸誌です。逆立ちする人物は『白樺』が紹介したイギリス・ロマン主義の先駆者ウィリアム・ブレイクの作風を彷彿とさせます。

広報用画像7
岸田劉生・表紙絵　『生長する星の群』第2年第5号
1922年　新しき村出版部・曠野社　個人蔵

◉古賀春江（1895-1933）
――大量複製時代の詩人

古賀春江は二科会を中心に活動した画家です。1922年に前衛グループ「アクション」に参加、シュルレアリスムをはじめ同時代の芸術を幅広く吸収しました。童画風の水彩画から、やがて出版物にあふれ始めた写真や科学の図解に関心を移し、それらを断片的にとりいれた幻想的な油彩画を展開しました。絵画の枠に囚われず舞台美術やポスター、装幀などにも活動の幅を広げ、不思議な魅力をもつデザインを生み出しました。

広報用画像8
古賀春江・表紙絵　『香蘭』第9巻第1号
1931年　香蘭詩社　個人蔵

◉小林かいち（1896-1968）
――逆輸入された謎多きデザイナー

小林かいちは関東大震災の直後から数年間、京都の「さくら井屋」で伝統的な手刷木版による絵葉書や絵封筒のデザインを行い、それらは1940年頃まで販売されました。1992年にフランス人のコレクションの一部として展示されて以来*、少しずつ業績が明らかにされてきた作家です。嘆く女性とキリスト教にまつわるモチーフ、19世紀イギリスのオーブリー・ビアズリーを彷彿とさせる細い線描、艶やかな色調が特徴です。

*「フィリップ・バロスコレクション　絵はがき芸術の愉しみ展 ―忘れられていた小さな絵―」（1992年、そごう美術館ほか）

広報用画像9
小林かいち　絵葉書セット『灰色のカーテン』より
1925-26年頃　さくら井屋（京都）　個人蔵

さまざまな意匠（イマジュリィ）

大正時代にはフランスの哲学者アンリ・ベルクソンによる、生命には創造的に進化する衝動（エラン・ヴィタル élan vital）が備わっている、*という思想が広まり、創造性が重んじられました。おりしも興隆した出版界において、青年たちは雑誌に文や絵を投稿し、自主出版で創意を世に問い、装幀や挿絵に自己を表現したのです。エラン・ヴィタルの視覚化から、浮世絵の再生、次世代を育む童画、耽美な怪奇美、都市の商業デザインまで、印刷にのせて人々の意識を変えたさまざまな意匠をたどります。

＊アンリ・ベルクソン『創造的進化』1907年

○エラン・ヴィタルのイマジュリィ

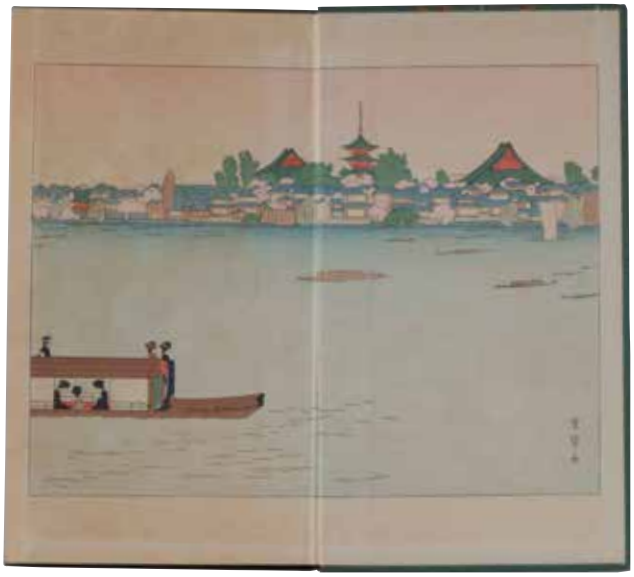
エラン・ヴィタル（élan vital）は、「生の飛躍」「生の躍動」などと訳されます。中学の英語の教科書などから学んだ英米ロマン主義のスピリチュアリズムと東洋的な「気」の感覚が結びつき、宇宙や自然の「永遠の生命」と自己の「内部生命」を謳う芸術観が広まりました。生い茂る植物、太陽、踊る女性など、大正イマジュリィに通底する「生」の表現を集めます。

広報用画像10
田中恭吉・木版画
《冬蟲夏草》
1914年　個人蔵

田中恭吉（1892-1915）は、東京美術学校に在学中から竹久夢二を慕い、恩地孝四郎、藤森静雄と三人で詩歌と木版画の同人誌『月映（つくはえ）』を発行しました。宿主の身体から成長する寄生植物を描いた《冬蟲夏草》には、結核で1年半後に他界する恭吉の「生」の感覚が表されています。

○浮世絵のイマジュリィ

西洋のジャポニスムを介して1890年代には日本でも浮世絵の再評価が始まりました。1908年には文士と洋画家が隅田川をセーヌ川に見立てて「パンの会」を結成。歌麿が活躍した江戸時代の町人文化とパリを重ね、懐かしい理想郷としての江戸を呼び起こします。大正時代の感性で理想的にアップデートされた浮世絵のイマジュリィを集めます。



広報用画像11
小村雪岱・見返／遲塚麗水（ちづかれいすい）・著　『東京大観』
1916年　有文堂書店　個人蔵

小村雪岱（せったい）（1887-1940）は、美術雑誌『國華（こっか）』に職を得て古画を研究し、江戸文芸に傾倒した幻想文学の先駆者・泉鏡花の装本を手がけ、新聞連載の挿絵で知られました。細く簡潔な線描と斬新で幾何学的な構図は同時代のアール・デコとも美意識を共有しています。

○子ども・乙女のイマジュリィ

エレン・ケイの『児童の世紀』（1900年）をきっかけに子どもを人として尊重する思想が国際的に広まり、児童教育のための出版物が数多く生み出されました。『赤い鳥』『コドモノクニ』のように自由な創造性を育む教養雑誌も創刊され、芸術としての童謡・童話・童画の世界を広めました。岡本帰一や加藤まさを、武井武雄らが描いた楽しくかわいらしい児童画を紹介します。

広報用画像12
岡本帰一・挿画／野口雨情・詩　「兎のダンス」『コドモノクニ』3巻5号
1924年　東京社　個人蔵

○怪奇美のイマジュリィ

「怪奇美（グロテスク）」とは、西洋古来の動植物や人間が融合した装飾文様や、オーブリー・ビアズリーらの背徳的な香りただよう世紀末美術を紹介する際に用いられた言葉です。それが、新聞雑誌の連載によって伝奇物語や冒険譚（たん）、捕物帳、陰惨な事件の謎を解く探偵小説などの読物が流行すると、「耽美」や「ミステリアス」「珍奇」などを含む幅広い意味で用いられるようになります。大衆を魅了した妖気ただようイマジュリィを集めます。

広報用画像13
水島爾保布・挿画／谷崎潤一郎・著　『人魚の嘆き・魔術師』
1919年　春陽堂　個人蔵

水島爾保布（おう）（1884–1958）は、日本画を学んだ後、大阪朝日新聞で耽美的・官能的な挿絵を描きました。谷崎潤一郎が1917年に発表した『人魚の嘆き』は、南京の貴公子が異国の商人から買い求めた人魚に恋をする幻想譚です。

○京都アール・デコのイマジュリィ

関東大震災の後には関西の出版文化が活気を帯びました。京都では、明治の遷都から積極的に近代化したモダン都市の顔と、震災で焼失した江戸に代わる古都としての顔を融合させ、洗練されたデザインが生み出されます。1920年代半ばに欧米から流入したアール・デコ様式と琳派などの装飾性を融合させた京都ならではのイマジュリィを展示します。

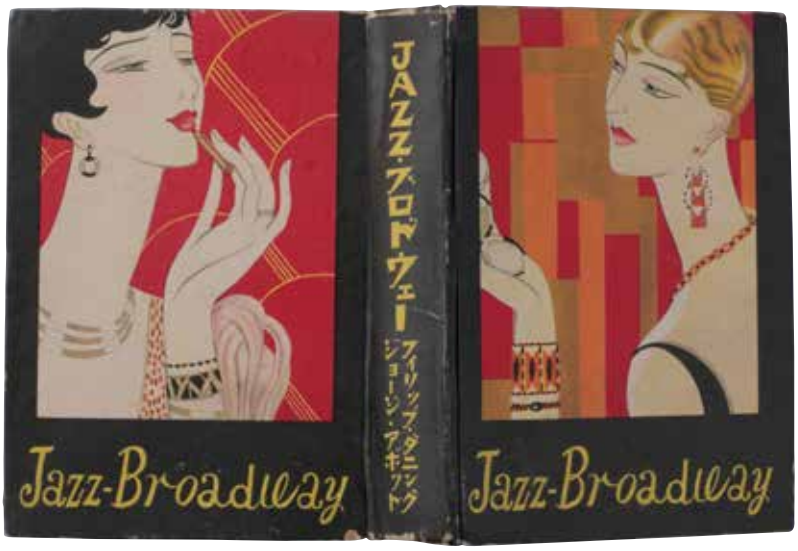
14

15

16

広報用画像14,15,16
小林かいち　絵封筒
大正末-昭和初期
さくら井屋（京都）　個人蔵

京都みやげとしても人気が高かった絵封筒。電話が珍しかった当時、手紙は毎日のようにやりとりする通信手段でした。小林かいちのデザインは、女学生たちの心を掴んだ色使いと、ハート、十字架、キャンドルといったキリスト教のモチーフなど、今見ても新鮮です。



○尖端都市のイマジュリィ

関東大震災から復興した東京のイマジュリィを紹介します。震災前の前衛芸術運動は、一方では重工業化社会の課題に向き合う労働運動に、もう一方では、急増したホワイトカラーなど都市の新興中流層の感性を捉えるモダニズムに展開しました。大衆に共通の教養を育んだ全集ブームと、享楽的な文化やファッションを紹介する情報誌の時代を紹介します。

広報用画像17
装幀者不詳／フィリップ・ダニング、ジョージ・アボット著
『世界大都会尖端ジャズ文学 JAZZ ブロドウェー』
1930年　春陽堂　個人蔵

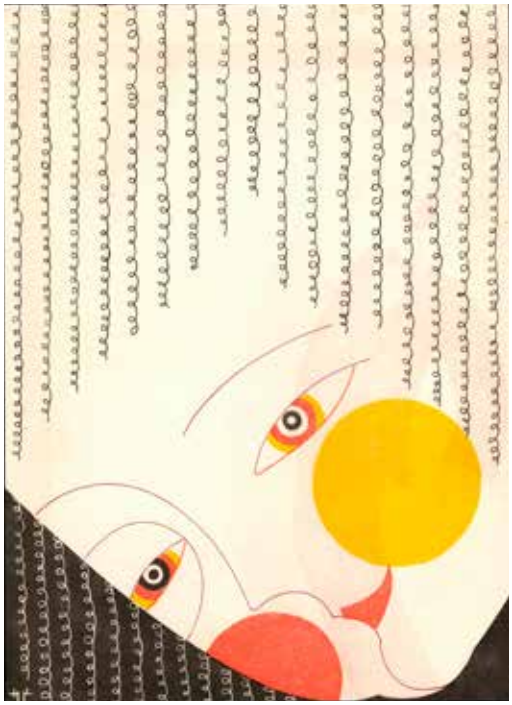
○大衆文化のイマジュリィ

都市の文化として広まった音楽、演劇、映画、レビューのパンフレットを展示します。大正時代には楽譜が爆発的に売れ、オペラの歌曲やジャズが日常に浸透しました。関東大震災後には新しい設備を備えた映画館や劇場が建設され、映画鑑賞やレビューが都市部の中流層の尖端的な娯楽になります。震災前のロマンティックな抒情性とはうってかわり、賑やかで軽やかな大衆文化が花開きました。

広報用画像18
AZU・表紙絵　『カジノフォーリーレヴュー舞踏団第42回公演』
1929-1933年　浅草水族館　個人蔵

○新興デザインのイマジュリィ

フォーヴィスム、キュビスム、イタリア未来派、ドイツ表現主義をはじめ西洋の前衛的な芸術運動に影響を受けた美術家たちによる出版の仕事を紹介します。絵画や彫刻というアカデミックな形式に囚われなかった彼らの多くは、大衆に直接訴えかけるデザインを手がけます。そのデザインには同時代の欧米から流入したアール・デコ様式がみられます。



広報用画像19
作者不詳　『商店図案撰集 第1集』
1928年　誠文堂商店界社　個人蔵

【アール・デコとは】
アール・デコは1910年代から1930年代に欧米で流行した装飾様式で、細い線、幾何学的な造形、享楽的な魅力が特徴です。今年からちょうど100年前の1925年にパリで開催された「現代産業装飾芸術国際博覧会」によって国際的に広まりました。「アール・デコ（Art Déco）」は1960年代以降の呼称で、当時は「スティル・モデルヌ（現代の様式）」、「ジャズ・モデルヌ」などと呼ばれていました。

【会期中のイベント】

各イベントの詳細は美術館ホームページで随時公開します

◉学芸員のギャラリートーク【自由参加】

7月18日[金]、7月25日[金] 18:00-18:40

本展担当学芸員が展覧会の見どころや出品作品について展示室で解説を行います
（展示フロアを移動しながらマイクを使用して説明します）

参加方法＝時間になりましたら5階展示室入口へお集まりください
参加費＝無料　＊ただし、本展への入場が必要です

◉ふぁみりー★で★とーく・あーと【要申込】

8月18日[月] 9:30-11:30

休館日に貸し切りの美術館で、ボランティアガイドと話しをしてみませんか？
作品解説を聞くのではなく、参加者が作品を見て、感じて、思うことを話しながら楽しむ参加型の作品鑑賞会です（定員30名）

参加方法＝web申込／7月11日[金] 10:00より美術館ホームページにて受付開始
参加費＝1,500円（税込）＊高校生以下無料　＊ご招待券、ご招待状、年間パスポート、割引等は適用できません

◉きもの割引のご案内

会期中、きものでご来館された方は当日券を100円引きでご購入いただけます
当日券ご購入時に美術館窓口へお申し出ください

・割引適用は一般当日券のみ、きものをお召しのご本人のみ有効　・他の割引との併用不可

○収蔵品コーナー

フィンセント・ファン・ゴッホ《ひまわり》、ほか

大正イマジュリィの世界

デザインとイラストレーションの青春 1900s—1930s

Taisho Imagerie

The Rise of Graphic Design & Illustration in Japan 1900s–1930s

会期＝2025年7月12日[土]－8月31日[日]
会場＝SOMPO美術館　〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
開館時間＝10:00-18:00（金曜日は20:00まで）＊最終入場は閉館30分前まで
休館日＝月曜日（ただし7月21日・8月11日は開館）、7月22日、8月12日

観覧料（税込）＊年齢は入場時点

一般（26歳以上）／事前購入券1,400円、当日券1,500円
25歳以下／事前購入券1,000円、当日券1,100円　高校生以下無料

身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳（ミライロIDも可）を提示のご本人とその介助者1名は無料、
被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料

・事前購入券は5月13日[火] 10:00から販売開始、公式電子チケット「アソビュー！」、イープラス、ローソンチケット（Lコード：32995）、チケットぴあ（Pコード：687-208）などでお買い求めいただけます　・手数料がかかる場合があります

主催＝SOMPO美術館、毎日新聞社　特別協賛＝SOMPOホールディングス　特別協力＝損保ジャパン
協力＝大正イマジュリィ学会　監修＝山田俊幸　後援＝新宿区、TOKYO MX
企画協力＝株式会社キュレイターズ

SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

https://www.sompo-museum.org/
050-5541-8600（ハローダイヤル）
アクセス：新宿駅西口より徒歩5分

今後の状況により、本展の会期や内容の変更、または臨時休館する可能性があります
最新情報は美術館ホームページ等でご確認をお願いします

プレスお問合せ

「大正イマジュリィの世界」展
広報事務局（ウインダム内）

e-mail sompo-m-pr@windam.co.jp
TEL. 03-6661-9447　FAX. 03-3664-3833

〒103-0014
東京都中央区日本橋蛎殻町2-14-11鴨下ビル2階